

異文化コミュニケーション

滋賀医科大学医学部附属病院 牛尾 哲敏

1, この研修に求めたものと達成感について

今年で6回目を迎える米国スタンフォード大学での海外研修に応募した動機は3つあった。1つ目は、研修募集要項にも記載されている、MR, CT, 分子イメージングに関する充実した研修内容を自分自身で体験し、米国における最先端の画像診断技術を学び、得た技術を日本の画像診断へのフィードバックすること、そして今後の自分自身の研究への取り組みについてのヒントを探すこと。2つ目は、米国の病院を見学することや医療システムの在り方、診療放射線技師の役割を知ること。3つ目は、日本放射線技術学会から選抜された精鋭との出会い。以上、3つが研修参加目的であった。1週間と短い研修期間ではあるが、プログラムは充実しており、講義はもちろん、病院、研究センター、3Dラボ等の施設見学、f-MRIの実習、とすべて満足のいくものであった。ただ、7T MRI装置が更新のために見ることが出来なかつたのは残念であった。特に私は心臓CTに興味があり、講義への期待度は大きかったが、短い講義時間であったせいか、この分野において日本の医療との格差はないと感じた。日本から留学中の循環器内科医師によるレクチャーも興味深い内容で、フリーディスカッションの中で、日本のCT技術は米国に負けていない、とコメントをいただき自信を持つことができた。また、米国と日本の医療保険制度の違いや米国の放射線技師の資格制度など、日本との種々制度の違いを知ることができ、有意義な研修であった。そして、精鋭との出会いは、学会や研究会レベルとは異なり、スタンフォード研修といった共通目標をもった野心にあふれた方々であるため、予想を超える絆が自然に築き上げられた。この研修での出会いは忘れることができない貴重な経験となった。広大なキャンパス、立派な研究施設、美しい建物や庭など、スタンフォードのすばらしい環境の中で充実した研修プログラムを受けられた事すべてが、私の中では大きな達成感につながった。

2, 研修で出会った仲間との今後の関わりについて

この研修では引率を含め 20 名のすばらしい精鋭と出会うことができた。社会的立場や年齢、専門分野も様々であるが、今後の技師生活において頼れる仲間となったことに間違いはない。生涯、スタンフォード同期生として様々な情報交換をしていきたい。

3, 日本の放射線技師のあるべき理想像

放射線技師教育制度の見直しや、専門技師制度の在り方と必要性を確立し、今後、診療放射線技師の社会的地位向上を強く願う。また、今後多くの技師がチャレンジ精神を持ち、このスタンフォード研修に参加し自ら見聞を広めてもらいたい。

最後になりましたが、この研修を企画して頂いた関係者の方々に感謝いたします。



(Michael Moseley 教授と筆者)